

校異源氏物語・松かせ

ひむかしの院つくりたて、花ちる里ときこえしうつろはし給ふにしのたるわた
殿などかけてまところけいしなどあるへきさまにしをかせ給ふひむかしのたい
はあかしの御かたとおほしをきてたりきたのたいはことにひろくつくらせ給て
かりにてもあはれとおほしてゆくすゑかけて契たのめ給し人、つとひすむへき
さまにへたてくしつらはせ給へるしもなつかしうみところありてこまかなる
しむてんはふたけたまはす時くわたり給ふ御すみ所にしてさるかたなる御し
つらひともしをかせ給へりあかしには御せうそたえすいまは猶のほり給ぬへ
きことをはのたまへと女は猶わか身のほとを思ひしるにこよなくやむことなき
きはの人くたに中くさてかけはなれぬ御ありさまのつれなきをみつ、もの
おもひまさりぬへくきをましてなにはかりのおほえなりとてかさいいてまし
らはむこのわか君の御おもてふせにかすならぬ身のほとこそあらはれめたまさ
かにはひわたり給ふついてをまつ事にて人わらへにはしたなきこといかにあら
むと思ひみたれてもまたさりとてかゝる所におひいてかすまへられ給はさらむ
もいとあはれなれはひたすらにもえうらみそむかすおやたちもけにことほりと
思ひなけくの中く心もつきはてぬむかしは、きみの御をほちなかつかさの宮
ときこえけるからうし給けるところおほるかはのわたりにありけるをその御の
ちはかくしうあひつく人もなくてとしころあれまどふを思いて、かのときよ
りつたはりてやとりのやうにてある人をよひとりてかたらふ世中をいまはと
思はて、かゝるすまひにしつみそめしかともすゑのよに思かけぬこといきてき
なんさらにみやこのすみかもとむるをにはかにまはゆき人中いとはしたなくゑ
中ひにける心ちもしつかなるましきをふるきところたつねとなむ思よるさる
へきものはあけはたさむすりなとしてかたのこと人すみぬへくはつくるひなさ
れなむやといふあつかりこのとしころらうする人もものし給はすあやしきやう
になりてはへれはしもやにそつくるひてやとりはへるをこの春のころより内の
大殿のつくらせ給ふ御たうちかくてかのわたりなむいとけさはかしうなりにて
はへるいかめしき御たうともたて、おほくの人なむつくりいとなみはへるめる
しつかなる御ほいならばそれやかひはへらむなにかそれもかのとの、御かけ

にかたかけてと思ふことありてをのつからをい／＼にうちのことゝもはしてむ
まついそきておほかたの事ともをものせよといふ身つからゝうするところには
へらねとまたしりつたへたまふ人もなければかこかなるならひにてとしころか
くろへ侍りつるなりみさうの田畠なといふことのいたつらにあればへりしかは
故民部大輔の君に申給はりてさるへきものなどたてまつりてなんらうしつくり
侍などそのあたりのたくはへの事ともをあやふけに思ひてひけかちになしに
くきかほをはななとうちあかめつゝはちふきいへはさらにそのたなとやうの事
はこゝにしますましたゝ年ころのやうに思ひてものせよ券などはこゝになむあれ
とすへて世中をすてたる身にてとしころともかくもたつねしらぬをその事もい
ま／＼はしくしたゝめむなどいふにも大とのゝけはひをかくれはわつらはしくて
そのゝちものなどおほくうけとりてなんいそぎつくりけるかやうに思ひよるら
んともしり給はてのほらむことをものうかるも心えすおほしわか君のさてつく
／＼とものしたまふを後のよに人のいひつたへんいまひときは人わろきゝすに
やとおもほすにつくりいてゝそしか／＼のところをなむおもひいてたるときこ
えさせける人にましらはむ事をくるしけにのみものするはかく思ふなりけりと
心え給ふくちをしからぬ心のようなとおほしなりぬこれみつのあそむれい
のしのふるみちはいつとなくいろひつかうまつる人なればつかはしてさるへき
さまにこゝかしこのようあなとせさせ給ひけりあたりおかしうてうみつらにか
よひたるところのさまになむはへりけるときこゆれはさやうのすまゐによしな
からすはありぬへしとおほすつくらせ給ふ御たうは大かく寺のみなみにあたり
てたきとのゝ心はへなとおとらすおもしろき寺也これはかはつらにえもいはぬ
まつかけになにのいたはりもなくたてたるしんてむのことそきたるさまをの
つから山さとのあはれをみせたりうちのしつらひなとまでおほしよるしたしき
人／＼いみしうしのひてくたしつかはすのかれかたくていまはと思ふにとしへ
つるうらをはなれなむことあはれに入道の心ほそくてひとりとまらんことを思
ひみたれてよろすにかなしすへてなとかく心つくしになりはしめけむ身にかと
露のかゝらぬたくひうらやましくおほゆおやたちもかゝる御むかへにてのほる
さいわいはとしころねてもさめてもねかひわたりし心さしのかなふといとうれ
しけれとあひみてすくさむいふせさのたへかたうかなしければよるひる思ほれ
ておなしことをのみさらはわか君をはみたてまつらては侍へきかといふよりほ
かの事なしはゝ君もいみしうあはれなりとしころたにおなしいほりにもすまず
かけはなれつればましてたれによりてかはかけとゝまらむたゝあたにうちみる

人のあさはかなるかたらひたにみなれそなれてわかるゝほとはたゝならさめる
をましてもてひかめたるかしらつき心おきてこそたのもしけなれとまたさる
かたにこれこそはよをかきるへきすみなれとありはてぬいのちをかきりに思
て契すくしきつるをはかにゆきはなれなむも心ほそしわかき人ゝのいふせ
う思ひしつみつるはうれしきものからみすてかたきはまのさまをまたはえしも
かへらしかしとよするなみにそへてそてぬれかなり秋のころほひなれはもの
のあはれとりかさねたる心ちしてそのひとあるあか月に秋風すゝしくてむしの
ねもととりあへぬにうみのかたをみいたしてゐたるに入道れいのこやよりふかう
おきてはなすゝりうちしてをこなひいましたりいみしう事いみすれとたれも
くゝいとしのひかたしわか君はいともくゝうつくしけによるひかりけむたまの
心ちして袖よりほかにはなちきこえさりつるをみなれてまつはし給へる心さま
などゆゝしきまてかく人にたかへる身をいまくゝしく思なからかたときみたて
まつらてはいかてかすくさむとすらむとつゝみあへす

ゆくさきをはるかにいのるわかれちにたえぬはおいの涙なりけりいともゆ
ゝしやとてをしのこひかくすあま君

もろともにみやこはいてきこのたひやひとり野中のみちにまとはんとてな
きたまふさまいとことはりなりこゝら契かはしてつもりぬるとし月のほとを思
へはかうゝきたることをたのみてすてしよにかへるも思へはゝかなしや御かた
いきてまたあひみむことをいつとてかゝきりもしらぬよをはたのまむをく

りにたにとせちにの給へとかたくゝにつけてえさるましきよしをいひつゝさす
かにみちのほともいとうしろめたなきけしきなり世中をすてはしめしにかゝる
人のくににおもひくたりはへりしことゝもたゝ君の御ためと思ふやうにあけく
れの御かしつきも心になふやうもやと思ひたまへたちしかと身のつたなかり
けるきはの思しらるゝことおほかりしかはさらにみやこにかへりてふるすらう
のしつめるたくひにてまつしきいへのよもきむくらもとのありさまあらたむる
こともなきものからおほやけたくしにおこましきなをひろめておやの御な
きかけをはつかしめむ事のいみしきになむやかてよをすてつるかとなりけり
と人にもしられにしをそのかたにつけてはよう思ひはなちてけりとおもひ侍る
に君のやうくおとなひ給ひものおもほしするへきにそへてはなとかうくちを
しきせかいにてにしきをかくしきこゆらんと心のやみはれまなくなけきわたり
はへりしまゝに仏神をたのみきこえてさりとともかうつたなき身にひかれて山か
つのいほりにはましりたまはしと思ふ心ひとつをたのみ侍しにおもひよりかた

くてうれしき事ともをみたてまつりそめてもなかなか身のほとをとさまかうさ
まにかなしうなけきはへりつれとわか君のかういておはしましたる御すくせの
たのもしきにかゝるなきさに月日をすくし給はむもいとかたしけなう契ことに
おほせ給へはみたてまつらさらむ心まとひはしつめかたけれとこの身はなかく
よをすてし心はへり君たちはよをてらし給ふへきひかりしるければしはしかゝ
る山かつの心をみたり給ふはかりの御契こそはありけめ天にむまるゝ人のあや
しきみつのみちにかへるらむ一時に思なすらへてけふなかくわかれたてまつり
ぬいのちつきぬときこしめすとも後のことおほしいとなむなさらぬわかれに御
心うこかし給ふなといひはなつものからけふりともならむゆふへまでわか君の
御ことをなむ六時のつとめにも猶心きたなくうちませはへりぬへきとてこれに
そうちひそみぬる御車はあまたつつけむもところせくかたへつゝわけむもわつ
らはしとて御ともの人ゝもあななちにかくろへしのふれはふねにてしのひや
かにとさためたりたつのときにふなてし給ふむかしの人もあはれといひけるう
らのあさきりへたゝりゆくまゝにいとものかなしくて入道は心すみはつましく
あくかれなめあたりこゝらとしをへていまさらにかへるもなをおもひつきせ
すあま君はなき給

かのきしに心よりにしあま舟のそむきしかたにききかへる哉御かた

いくかへりゆきかふ秋をすくしつゝうき木にのりてわれかへるらんおもふ
かたの風にてかきりけるひたかへすいり給ぬ人にみとかめられしの心もあはれは
みちの程もかろらかにしなしたりいへのさまもおもしろうてとしころへつるう
みつらにおほえたれはところかへたる心ちもせすむかしのこと思ひいてられて
あはれなることおほかりつくりそへたるらうなとゆへあるさまにみつのなかれ
もおかしうしなしたりまたこまやかなるにはあらねともすみつかはさてもあり
ぬへししたしきけいしにおほせ給て御まうけのことせさせ給けりわたり給はむ
ことはとかうおほしたはかるほとにひころへぬなかゝもの思ひつゝけられて
すてしいへるも恋しうつれゝなれはかの御かたみのきむをかきならすおりの
いみしうしのひかたければ人はなれたるかたにうちとけてすこしひくに松風は
したなくひゝきあひたりあま君ものかなしけにてよりふし給へるにおきあかり
て

身をかへてひとりかへれる山さとにきゝしににたる松風そふく御かた

ふるさとにみしよのともをこひわひてさえつることをたれかわくらんかや

うにものはかなくてあかしくらすにおとゝ中ゝしつ心なくおほさるれば人め

をもえは、かりあへ給はてわたり給を女君はかくなむとたしかにしらせたま
つり給はさりけるをれるのき、もやはせ給ふとてせうそこきこえ給ふかつら
にみるへきことはへるをいさや心にもあらてほとへにけりとふらはむといひし
人さへかのわたりちかくきゐてまつなれは心くるしくてなむさかの、みたうに
もかさりなき仏の御とふらひすへければ二三日は侍なんときこえ給かつらの院
といふところにはかにつくらせ給ふときくはそこにすへ給へるにやとおほすに
心つきなればおの、えさへあらため給はむほとやまちとをにと心ゆかぬ御け
しきなりれいのくらへくるしき御心いにしへのありさまなこりなしと世人もい
ふなるものをなにやかやと御心とり給程にひたけぬしのひやかにこせむうとき
はませて御心つかひしてわたり給ひぬたそかれときにおはしつきたりかりの御
そにやつれ給へりしたに世にしらぬ心ちせしをましてさる御心してひきつくろ
ひ給へる御なをしすかたよになくなまめかしうまはゆき心ちすれは思ひむせへ
る心のやみもはる、やうなりめつらしうあはれにてわか君をみたまふもいか、
あさくおほされんいま、てへたてけるとし月たにあさましく、やしきまておも
ほす大とのはらの君をうつくしけなりとよ人もてさはくは猶ときよによれば人
のみなすなりけりかくこそはすぐれたる人の山くちはしるかりけれとうちゑみ
たるかほのなに心なきかあいきやうつきにほひたるをいみしうらうたしとおほ
すめのとのくたりし程はをとろへたりしかたちねひまさりてつきころの御もの
かたりとなれきこゆるをあはれにさるしほやのかたはらにすくしつらむこと
をおほしのたまふこ、にもいとさとはなれてわたらむこともかたきを猶かのほ
いあるところにつろひ給へとのたまへといゐくしきほとすくしてとき
こゆるもことはりなりよと夜よろつに契かたらひあかし給ふつくろふへきと
ころくゝのあつかりいまくはへたるけいしなどにおほせらるかつらの院にわた
り給ふへしとありければちかきみさうの人くゝまいりあつまりたりけるもみな
たつねまいりたりせむさいとものおれふしたるなとつくろはせ給ふこ、かしこ
のたていしとも、みなまろひうせたるをなさけありてしなさはおかしかりぬへ
きところかなかゝるところをわさとつくろふもあいなきわさなりさてもすくし
はてねはたつときものうく心とまるくるしかりきなときしかたのことものたま
ひいて、なきみわらひみうちとけのたまへるいとめてたしあま君のそきてみた
てまつるにおいもわすれもの思ひもはる、心ちしてうちゑみぬひんかしのわた
との、したよりいつるみつの心はへつくろはせ給とていとなまめかしきうちき
すかたうちとけ給へるをいとめてたう、れしとみたてまつるにあかのくなどの

あるをみたまふにおほしいて、あま君はこなたにかいとしとけなきすかたなり
けりやとて御なをしめしいて、たてまつるき丁のもとにより給てつみかくお
ほしたてたまへる人のゆへは御おこなひのほどあはれにこそおもひなしきこゆ
れいといたく思すまし給へりし御すみかをすて、うきよにかへり給へる心さし
あさからすまたかしこにはいかにとまりて思をこせ給ふらむとさま／＼になむ
といとなつかしうの給すてはへりし世をいまさらにたちかへり思ひたまへみた
るゝををしはからせ給ひければいのちなかさのしるしも思ひ給へしられぬると
うちなきてあらいそかけに心くるしうおもひきこえさせはへりしふたはのまつ
もいまはたのもしき御をひさきといはるきこえさするをあさきねさしゆへやい
かゝとかた／＼心つくされはへるなときこゆるけはひよしなからねはむかしも
のかたりにみこのすみ給けるありさまなとかたらせ給ふにつくろはれたるみつ
のをとなひかことかましうきこゆ

すみなれし人はかへりてたとれともしみつはやとのあるしかほなるわさと
はなくていひけつまみやひかによしとき、給ふ

いさらゐは、やくのこともわすれしをもとのあるしやおもかはりせるあは
れとうちなかめてたち給ふすかたにほひ世にしらすとのみおもひきこゆみてら
にわたり給ふて月ことの十四五日つこもりの日おこなはるへきふけむかうあみ
たさかの念仏の三昧をはさるものにて又／＼くはへをこなはせ給ふへき事など
さためをかせ給ふたうのかさり仏の御具なとめくらしおほせらる月のあかき
かへり給ふありしよのことおほしいてらるゝおりすくさすかのきむの御ことさ
しいてたりそこはかとなくものあはれなるにえしのひ給はてかきならし給ふま
たしらへもかはらすひきかへしそのおりいまの心ちし給ふ

ちきりしにかはらぬことのしらへにてたえぬ心のほとはしりきや女

かはらしと契しことをたのみにてまつひ、きにねをそへしかなときこえ
かはしたるものにけなからぬこそは身にあまりたるありさまなめれこやうねひ
まさりにけるかたちけはひえおもほすつましうわか君はたつきもせすまほら
れ給ふいかにせましかくろへたるさまにておいゝてむか心くるしうくちをしき
を二条の院にわたして心のゆくかきりもてなさは後のおほえもつまめぬかれな
むかしとおもほせとまた思はむ事いとをしくてえうちいて給はてなみたくみて
みたまふおさなき心にすこしはちらひたりしかやうやうゝちどけてものいひ
わらひなとしてむつれたまふをみるまゝににほひまさりてうつくしいたきてお
はするさまみるかひありてすくせこよなしとみえたりまたの日は京へかへらせ

給ふへければすこしおほどのこもりすくしてやかてこれよりいて給ふへきをつらの院に人々おほくまいりつとひてこゝにも殿上人あまたまいりたり御さうすくなとしたまいていはしたなきわさかなかくみあらはさるへきくまにもあらぬをとてさはかしきにひかれていて給ふ心くるしければさりけなくまきはしてたちとまり給へるとくちにめのとわか君いたきてさしいてたりあはれる御けしきにかきなてたまひてみてはいとくるしかりぬへきこそいとうちつくなれいかゝすへきいとさどゝをしやとのたまへはゝるかに思たまへたえたりつるとしころよりもいまからの御もてなしのおほつかなう侍らむは心つくしになときこゆわか君てをさしいてゝたち給へるをしたひ給へはついゐたまひてあやしうものおもひたえぬ身にこそありけれしはしにてもくるしやいつらなともろともにいてゝはおしみたまはぬさらはこそ人心ちもせめとのたまへはうちわらひて女君にかくなむときこゆ中々もの思ひみたれてふしたれはとみにしもうこかれすあまり上すめかしとおほしたり人々もかたはらいとかれはしふゝゝにゐさりいてゝき丁にはたかくれたるかたはらめいみしうなまめいてよしありたをやきたるけはひみこたちといはむにもたりぬへしかたひらひきやりてこまやかにかたらひ給ふとてとはかりかへりみ給へるにさこそしつめつれみをくりきこゆいはむかたなきさかりの御かたちなりいたうそひやき給へりしかすこしなりあふほとになり給ひにける御すかたなどかくてこそものゝかりけれと御さしぬきのすそまてなまめかしうあいきやうのこほれいつるそあなかななるみなしなるへきかのとけたりしくら人もかへりなりにけりゆけひのせうにてことしかうふりえてけりむかしにあらため心ちよけにて御はかしとりによりきたり人かけをみつてきしかたのものわすれしはへらねとかしこければえこそうら風おほえ侍つるあか月のねさめにもおとろかしきこえさすへきよすかたになくてとけしきはむをやへたつ山はさらにしまかくれにもおとらさりけるをまつもむかしのとたとられつるにわすれぬ人もゝのし給ひけるにたのもしなといふこよなしやわれも思ひなきにしもあらさりしをなとあさましうおほゆれといまことさらにとうちけさやきてまいりぬいとよそほしくさしあゆみ給ふほどかしかましうをひはらひて御車のしりに頭中將兵衛督のせたまふいとかるゝしきかくれかみあらはされぬるこそねたうといったうからかり給よへの月にくちをしう御ともにをくれ侍にけるとおもひ給へられしかはけさきをわけてまいり侍つる山のしきはまたしう侍りけりへの色こそさかりにはへりけれなにかしのあそむのこたにかゝつらひてたちをくれ侍ぬるいかゝなりぬらむなどいふ

けふは猶かつらとのとてそなたさまにおはしましぬにはかなる御あるしとさはきてうかひともめしたるにあまのさへつりおほしいてらるのにとまりぬるきむたちことりしるしはかりひきつけせたるおきのえたなとつとにしてまいれりおほみきあまたゝひすむなかれてかはのわたりあやうけなれはゑひにまきれておはしましくらしつをのく絶句なとつくりわたして月はなやかにさしいつるほどにおほみあそひはしまりていといまめかしひきものひはわこむはかりふえとも上すのかきりしておりにあひたるてうしふきたつるほどかは風吹あはせておもしろきに月たかくさしあかりよろつの事すめるよのやゝふくるほどに殿上人四五人はかりつれてまいれりうへにさふらひけるを御あそひありけるついでにけふは六日の御ものいみあくひにてかならずまいり給へきをいかなれはとおほせられければこゝにかうとまらせ給にけるよしきこしめして御せうそこあるなりけり御つかひはくら人の弁なりけり

月のすむかはのをちなる里なれはかつらのかけはのとけかるらむうらやましうとありかしこまりきこえさせ給ふうへの御あそひよりもなをとところからのすこさそへたるものゝねをめてゝまたゑひくはゝりぬこゝにはまうけのものもさふらはさりければおほゐにわさとならぬまうけのものやといひつかはしたりとりあへたるにしたかひてまいらせたりきぬひつふたかけにてあるを御つかひの弁はとくかへりまいれは女のさうすくかつけたまふ

ひさかたのひかりにちかき名のみしてあさゆふきりもはれぬ山里行幸まち

きこえ給ふ心はへなるへし中におひたるところうちすんし給ふついてにかのあわちしまをおほしいてゝみつねかところからかとおほめきけむことなどの給ひいてたるにもあはれなるゑいなきともあるへし

めくりきてゝにとるはかりさやけきやあはちのしまのあはとみし月頭中将

うき雲にしはしまかひし月かけのすみはつるよそのとけかるへき左大弁す

こしおとなひてこ院の御ときにもむつまじうつかうまつりなれし人なりけり

雲のうへのすみかをすてゝよはの月いつれのたにゝかけかくしけむ心く

にあまたあめれとうるさくてなむけちかうゝちしつまりたる御物かたりすこしうちみたれてちとせもみきかまほしき御ありさまなれはをのゝえもくちぬへれとけふさへはとていそきかへり給ふものとしなしなにかつけてきりのたえまにたちまじりたるもせむさいのはなにみえまかひたるいろあひなとことにめてたし近衛つかさのなたかきとねりものゝふしともなとさふらふにさうくしければそのこまなとみたれあそひてぬきかけ給ふ色色秋のにしきを風のふきお

ほふかとみゆのゝしりてかへらせたまふひゝきおほるにはものへたてゝきゝて
なこりさひしうなめ給ふ御せうそこをたにせてとおとゝも御心にかゝれりと
のにおはしてとはかりうちやすみ給ふ山さとの御物かたりなときこえ給ふいと
まきこえしほとすきつれはいとくるしうこそこのすきものどものたつねきてい
といたうしひとゝめしにひかされてけさはいとなやましとおほとのこもれり
れの心とけすみえ給へとみしらぬやうにてなすらひならぬ程をおほしくらふ
るもわるきわきなめりわれはわれと思なし給へとをしへきこえ給ふくれかゝる
ほとに内へまいり給ふにひきそはめていそきかき給ふはかしこへなめりそはめ
こまやかにみゆうちさゝめきてつかはすをこたちなとにくみきこゆそのよはう
ちにもさふらひ給ふへけれとゝけさりつる御けしきとりに夜ふけぬれとまかて
給ひぬありつる御かへりもてまいれいひきかくし給はて御らんすことににく
かるへきふしもみえねはこれやりかくし給へむつかしやかゝるものゝちらむも
いまはつきなきほとになりにつりてとて御けうそくにより給ひて御心のうちに
はいとあはれに恋しうおほしやるるれはひをうちなかめてことにものものたま
はすふみはひろこりながらあれと女君みたまはぬやうなるをせめてみかくし給
ふ御ましりこそわつらはしけれとてうちゑみ給へる御あいきやうところせきま
てこほれぬへしさより給ひてまことはらうたけなるものをみしかはちきりあ
さくもみえぬをさりとてものめかさむほとはゝかりおほかるに思ひなむわつ
らひぬるおなし心におもひめくらして御心に思さため給へいかゝすへきこゝに
てはくゝみたまひてんやひるのこかよはひにもなりにけるをつみなきさまなる
も思ひすてかたうこそいはけなけなるしもつかたもまきはさむなとおもふを
めさましとおほさすはひきゆひたまへかしときこえ給ふおもはすにのみとりな
し給ふ御心のへたてをせめてみしらすうらなくやはとてこそいはけなからん御
心にはいとよかなひぬへくなんいかにうつくしきほとにとてすこしうちゑみ
給ひぬちこをわりなうらうたきものにしたまふ御心なれはえていたきかしつか
はやとおほすいかにせましむかへやせましとおほしみたるわたり給こといとか
たしさかのゝみたうの念仏なとまちいてゝ月にふたたびはかりの御ちきりなめ
りとしのわたりにはたちまさりぬへかめるをゝよひなきことゝおもへとも猶い
かゝものおもはしからぬ